ふたりの兄嫁
FUTARI NO ANIYOME
AFTER STORY BOOK

ふたりの兄嫁
FUTARI NO ANIYOME
AFTER STORY BOOK

あかね　ただいま発熱CHU♥ …… 4
紗由美　肌とプロポーズと私 …… 19
静玖　恋のオーダー・NON・ストップ …… 35

ただいま発熱CHU♥

挿絵　カワギシケイタロウ
作　Ｔｏｎｅ

美原 あかね

幼い頃の約束を果たすため、強引に祥悟の妻となった謎の美少女。

実は勇二の会社の大口取引先である『美原クリエイト』の令嬢で、取引拡大を条件に先方が勇二にこの縁談を持ちかけた。

ただいま発熱ＣＨＵ♥

進也とあかねの夫婦が目覚まし時計に叩き起こされたのは、いつもよりずっと早い時間だった。
今日は待ちに待った、二人っきりで旅行する日なのだ。
「それじゃ、早いとこ朝ご飯食べよっか」
目覚ましのベルを止めた進也がそう言って愛妻の方を振り向くと、彼女はベッドの上に座り、ぼんやりとしている。
「あかね？」
あかねは首から上をふらふらとさせている。
「どうしたの？」
進也が尋ねると、半分閉じた目で、あかねはたどたどしく言う。
「ん……なんか、頭がぼーっとしてて……寝ぼけてるの、かな」
安定しない動きで、ベッドから降りるあかね。
ベッド脇には、荷物が一杯につまった旅行カバンが二つ並んでいた。

※

朝食は、昨晩のうちに作っておいたサンドイッチと、レンジするだけの冷凍食品だ。
手早く料理を並べて、進也達はパジャマのまま、いつもよりずっと早い朝食を摂る。
三個目のサンドイッチに手を伸ばした時、進也はふと気がついた。
あかねの前の皿に積まれたサンドイッチが、一個しか減っていない。
その一個はあかねが今手に持っているものだが、それも半分ほどしか食べていなかった。
食べるペースが遅すぎる……どうしたんだろう？
進也が見守る中、あかねは、口を半分だけあけると、サンドイッチの端の方を囓る。
たったそれだけを噛み、飲み込むのに、随分と時間をかけていた。しかも、まるでおいしそうではない。乾

パンにジャムをつけずに食べているみたいな顔つきだ。
　血色も悪いし、そういえば朝、頭がぼうっとしているとか言っていた。もしかして、風邪でもひいているんじゃないか。
　そう進也が思っていると、あかねがその視線に気づいた。
「あ、こんなに早く起きちゃったからさ、おなかがまだ眠ってんのよね。もうちょっとしたら、きっと食欲出てくるわ」
　慌てたように言い、笑顔を作るあかねに対し、進也の表情は険しいままだ。
「あかね……」
「このサンドイッチは、ラップに包んで持ってきましょ。きっと途中で食べたくなるから」
　わざとらしい元気さでそう言うと、あかねはまだ三分の一以上残っているサンドイッチを置き、席を立った。
食卓についた手が、微妙に震えている。
　ラップをとりに行こうというのか、キッチンへと向かうあかねの足下がふらついているのを見て、進也も立ち上がる。
「あかね、待って」
　急いであかねのそばに歩み寄り、有無を言わさず彼女の額に手を当てた。
「……！」
　進也の顔がいっそう険しくなる。
「あの、あたし……」
「あかね、熱を測ろう」
「そ、そんなことしなくたって、大丈夫よ！　元気だから、ほら」
あかねは胸の前で両手を握り、その場でぴょんとジャンプした。
　着地した途端、ぐらりとバランスを崩して、壁に手をつく。
　進也は戸棚から救急箱を引っ張り出すと、中から体温計を取り、あかねに差し出す。
「だからいいってば！」
「熱を測るんだ」
　いつになく語気鋭く、進也は言った。あかねはなおも抵抗しようとしたが、進也の真剣な目つきに、しぶし

ぶと体温計を受け取る。
「……体温が普通なら、問題無いよね？」
つぶやくように言うあかね。進也はうなずいて、体温計を使うよううながした。
あかねはパジャマのボタンを二つ外して、体温計をわきの下に挟む。
無言のまま、時間が過ぎた。あかねは、まるで念力で体温を下げようとでもするかのように、体温計をじっと睨んでいる。
ピピっという電子音が鳴った。
あかねはすぐさま体温計を引き抜き、小さな液晶に映った数字を見て、息をのむ。次いで大急ぎで微笑み、
「あ、やっぱり大丈……」
進也は、あかねが表示をリセットする前に、奪うように体温計を取った。
三十八度六分。
「旅行は、中止だね」
「そんな……中止なんてする必要無いわ！　これくらいの熱、薬飲めばすぐに治っちゃうから！」
言いながら、救急箱から常備薬の解熱剤を取り出し、食卓に置いてあった自分の飲み物で流しこむ。
「それじゃ、出発の準備しましょ。ほら、もうこんな時間、早くしないと飛行機の時間に……」
進也は、ゆっくりと首を振った。
「ダメだよあかね。こんな熱で旅行は無理だ。お金はもったいないけど、キャンセルしよう」
「い、いやよ！　せっかく進也と二人っきりの旅行なのに……あたし、何日も何週間も前から楽しみにしてたのに……！　キャンセルなんてそんなのないよ。薬飲んだじゃない、よく効くのよこの薬、ね。絶対、絶対治るから……！」
「ダメっ！」
怒鳴りつけるような進也の声に、あかねは一瞬硬直した。
「……っ！」
次いで、大きく見開かれた両目にじわりと涙がわき出し、大粒になって溢れた。
「……いいわよ」
あかねは、歯をぎっと食いしばり、悔しそうに目を閉じた。瞼が下がると同時に、さらに多くの涙がこぼれ、

次々と頬を伝って床に落ちる。
「もう、いいわよっ！」
くるっと進也に背を向けると、あかねは走りだした。
「あかね！　走っちゃ……」
進也の言葉を無視し、あかねは寝室にとびこんだ。バタンッ！　と家が揺れるほど大きな音を立てて、ドアが閉まる。
後を追った進也は、そっと寝室のドアを開けて様子をうかがった。あかねは頭まで布団をかぶり、ミノムシみたいになっている。
分厚い布団を通して、小さく嗚咽の音が漏れていた。
今は、そっとしておいた方がいいだろう。
そう考えた進也は、そっとドアを閉めた。

※

なんで、あたしは自分の部屋で寝てるんだろう。
目を覚まして、あかねは最初にそう思った。
進也と旅行をしているはずなのに。とても、とても楽しい旅行をしているはずだったのに……
そのうち、それは自分が寝ている間に見た夢だとわかった。その時には、もう夢の内容は指の間から落ちる砂のように消えていき、思い出せなくなっている。
あかねは、目だけ動かして辺りを見た。
カーテンが二重に閉められていて、部屋は暗い。カーテンの合わせ目から赤みを帯びた光が入ってきていて、今が夕刻であることが知れる。
こんな遅い時間じゃ、これから出発するのは無理……
そう思って、あかねはまた、自分の目が潤むのを感じた。すでに目元がヒリヒリするほど泣いたのに。
「起きた？」
横手から声がかかり、あかねはそちらを向いた。

進也が椅子に座っている。
横を向いた拍子に、額から何かがパサリと落ちた。たたんだ濡れタオルだ。
「おなか、減ってるでしょ？」
微笑みながら進也が言う。
今まで気づかなかったが、そう言われると、空腹感を自覚する。
しかし、素直にうなずけなかった。出かけることを許してくれなかった進也に、わだかまりがある。
「お粥持ってくるから」
進也はあかねの返事を待たず、立ち上がって出ていった。
ドアがパタンと閉まるまで進也の姿を見送った後、あかねは再び天井を向く。
枕に落ちた濡れタオルを、もう一度額に乗せた。冷たさが心地いい。
……タオルが冷たいってことは、進也はタオルがぬるくなるたんびに、取り替え続けてくれたってことよね。
朝から、夕方まで、ずっと。
そのことを思うとまた目元が熱くなってしまい、あかねは濡れタオルを目隠しするように数センチずり降ろした。
間もなく、進也がお粥を持って帰ってきた。
「冷蔵庫は旅行に備えてカラだし、あかねを残して買い物にも行けないし……そういうわけで、味つけが塩だけなんだ。ごめん」
進也は苦笑しつつ、お盆に載せた小さな鍋を、ベッドサイドテーブルに置く。
あかねは掛け布団をめくって、ベッドの上に横座りになった。朝と違って、ふらふらした感じや熱っぽさは無い。
治ったみたい……進也に、看病してくれてありがとうって言わなくちゃ……
あかねはそう思ったが、やはりうまく口が動かず、進也と視線を合わせられなかった。
そんなあかねの気持ちを見越しているのだろうか。進也は、鍋の蓋をとってお盆をあかねに差し出し、明るく言った。
「はい、熱いから気をつけて食べてね」
もうもうと立ち上がる湯気といい、それと一緒に漂ってくるお粥の匂いといい、あかねの食欲はいたく刺激

された。何しろ、昨日の夕食以来、サンドイッチを半分とちょっと食べただけなのだ。
それでも、あかねはさじに手がいかなかった。
「どうしたの？　まだ食欲戻ってこない？」
「……」
どうしてあたし、素直になれないんだろう。自分でも……イヤになる……
そんな思いのあかねを見て、進也は彼女の表情を辛そうだと判断した。
「ごめん、食べ物の匂いかいで気分悪くなったかな？　すぐお粥さげるから」
「えっ？　あっ……」
お粥がひょいと引っ込められようとしたその瞬間、あかねのおなかが、ぐーっという実に素直な主張をした。
一瞬の間。あかねは真っ赤になる。
「なんだ、やっぱりおなかすいてるんでしょ？」
「す、すいていないなんて、言ってないじゃない。冷めるの待ってたのよっ！」
思わず、あかねはそんな反論をしていた。
すぐさま襲ってくる猛烈な後悔、しかし進也の言葉が、それをかき消した。
「いいよ、じゃあ、僕が冷ましてあげる」
「えっ？」
進也はさじですくったお粥を、ふーふーと吹いて冷ました。
「さ、あーんして」
「……」
赤面し、今度は恥ずかしさで食べるのを躊躇するあかね。
「ほら、あーん」
しかし冷めるのを待っていたと言い訳した以上、拒むわけにもいかず、とうとうぱくっと食べる。
「……おいしい？」
「……う、うん……」
「じゃあ、もう一口……はい、あーん」
昨日の夜以来、ろくに食べていなかったあかねは、そんな調子で進也の差し出すお粥を食べ続けた。間もな

く、お粥は残らずあかねの胃に収まった。
「もっと食べる？」
首を横に振るあかねの顔は、しっかり睡眠と食事をとったせいか、朝に比べてずっと血色がよくなっている。
身体が熱を取り戻し、空腹が癒え……かたくなに張りつめていたあかねの意地が、緩んだ。
あかねの肩がぶるぶると細かく震えだした。
下を向き、握った拳をベッドに押しつけるようにしている。
「あかね？」
「……ごめんね」
ぽたっと、シーツの上に雫が落ちて、円形の染みを作る。
「……ごめんね……あたし、進也に迷惑ばかりかけて……ごめんね……ごめんね……」
進也はあかねの両頬に手を添え、上を向かせた。
とめどなく流れる涙で、あかねの顔はくしゃくしゃになっている。
「泣かないであかね」
「でも……あたし、肝心な時に病気になるし……進也に一日中看病させるし……進、也に、迷惑、ば、かり……」
最後の方は、嗚咽で切れ切れになるあかねの言葉。
進也は濡れタオルで優しくあかねの涙を拭った。
「あかねに無理をさせてまで、旅行に行きたくなんかないよ。看病なんてどうってことない。元気なあかねが好きだから、早くよくなってもらいたいんだ」
そう言うと、進也はあかねの唇に軽くキスした。
あかねの中に、爆発するように進也への愛しさが広がっていく。
進也……進也……進也……っ！
次の瞬間、あかねは進也を押し倒すような勢いで抱きついてきた。
「進也大好きぃぃぃぃぃっ！」
力一杯進也の身体を抱きしめながら、今度はあかねの方からキスした。しかも、すぐさま舌を入れていく。
進也はのけぞって弓なりなった背を戻しつつ、自分も舌を伸ばし、あかねのそれと絡めた。
「んん……んっ……ちゅ……ん……」

あかねの舌使いはいつにも増して熱心で、情熱的で、進也の口の奥の方まで、伸びてくる。
半開きになった口もとから唾液が垂れるのもいとわず、あかねは取り付かれたように進也の口腔のあらゆる場所を舐めまわしていった。
あかねの吐息が熱くなり、進也とキスすることに没頭している。
「んっ……ちゅ……あん……んんっ……ん、んっ……」
激しく複雑に舌をからませあい、唾液をこぼしながら交換していくうち、あかねだけでなく進也の呼吸も荒くなっていった。それどころか、股間はすでに痛いほど張りつめている。
しかし、進也はキス以上のことをする気配が無い。
エッチしたいのは山々だけど、病気のあかね相手に無理は禁物。ここは我慢しないといけない。
そう思っているからだ。
すると、あかねがいったんキスを中断して言う。
「進也……もうあたし、熱は下がったから、大丈夫よ」
「え……」
内心を見透かされたせいか、進也は顔を赤くした。
「朝と比べて、ずっと気分がいいもの。ね？」
小首をかしげて、誘う。自分でパジャマのボタンを上半分だけ外して豊かな乳房の端をさらし、あとは進也に任せた。
進也は少しの間、あかねの胸元に目を釘付けにしつつもなにやら葛藤していたようだが、やがて残ったボタンに手を伸ばした。
パジャマの前のボタンを全て外し、大きく前を開いて肩を露出させる。
それまでパジャマの中にこもっていた、寝汗でしめった空気が周りに放散した。
うあ……寝汗の匂いが……！
「あ、や、やっぱりちょっと待って。シャワー浴びてくるわ」
顔を真っ赤にしたあかねはそう言って立ち上がろうとしたが、進也は肩を押さえつけてそれを押しとどめる。
「え？　ちょ……ダメよ、あたし、寝汗たくさんかいたから、匂いが……」
「構わない。あかねの匂いは、大好きだから」

そう言って、進也はあかねをベッドに押し倒す。パジャマの下を、下着ごと一気に脱がした。照明に照らされるあかねの肢体は、まだ残る寝汗でしっとりと濡れており、それがなんともいやらしい光景になっている。

進也は素早く服を脱ぐと、あかねの足元に四つんばいになる。

「……？」

あかねが進也の行動を不思議に思っていると、彼はまず足の甲に口づけした。

「あ……」

それをかわきりに、足首、ふくらはぎ、太ももと、だんだんとあがっていきながらあかねの身体をなめまわした。

「ふあ……あ……あ、やだ……」

ぴくっぴくっと身体を震わせるあかねの表情は、くすぐったさと気持ちよさと恥ずかしさがそれぞれ三分の一ずつといったところ。しかし進也が徐々に上にあがってくるに従い、快感の比重が高まってくる。

進也はわざと秘所を避けて、へそ、脇腹ときて、ひとしきり乳房を舌と唇と歯で思う存分楽しむ。

「ああっ、ん……あ、ああっ……うああっ……」

シーツをぎゅっと掴み、じわじわと炙られるような愛撫に、あかねは声をあげる。

胸への攻撃を終えると、進也は鎖骨、首筋、耳に舌を這わせ、最後にあかねの唇を終着駅とした。

「んん……ん、んんっ……ん……あ、んん……」

全身へのキスの仕上げにふさわしい、濃厚なディープキスを交わす進也とあかね。

それが終わった頃には、あかねはもう、息も絶え絶えといった様子だ。自分のかいた寝汗を味わわれたという恥ずかしさが、かえって彼女の官能を激しく燃えたたせていた。

一方進也は、豊かな胸を上下させて横たわるあかねの両足を掴み、大きく開かせた。

「最後まで、大丈夫、だよね」

「うん……」

うっとりとうなずくあかね。期待で彼女の心拍数が跳ね上がる。

進也は天井を指す自分のペニスを、愛液を大量に分泌してシーツをぐちゃぐちゃにしているあかねの秘苑にあてがった。

「あ……」
先端が触れただけだというのに、あかねは思わず声を漏らし、身体をぶるっと震わせててしまう。
「あかね、挿れるよ……」
催促するように、大きく首を縦にふるあかね。進也は、ゆっくりと彼女の中に侵入してくる。
「うあ……あ、あ……」
待ちわびた挿入に、あかねは喜びと快感の入り交じった声をあげる。
しかし――
進也は最奥まで侵入しない。ゆるゆる控えめなペースで抜き差しを繰り返す。
やっぱり、まだあたしを気遣ってるんだ……。
「あっ……ああ……ん、進也……」
あかねは甘ったるく名を呼びながら、長くほっそりとした足を、相手の腰に巻き付ける。
「も、もっと……強くして……」
蠱惑的な声色で、言う。進也の理性を奪うのに、充分な艶っぽい表情で。
「う、うん、わかった……」
一つうなずき、進也はこれまでより三割ほど強く突き込んだ。
……！　進也のが、奥に……でも、もっと……もっと欲しい……！
「ああああっ！　もっと、もっとして！」
シーツを掴み、あられもなくさらなる刺激を求めるあかね。
進也はその要求に応じ、腰の振りを徐々に大きくしていった。
「う、あ……ああっ、ああっ、あんっ、あああっ……ふあ、あああっ！」
腰をうちつける強さに比例するように、あかねの嬌声が高まっていく。
桃色に染まった身体をくねらせ、成熟した乳房をぷるんぷるん振るわてあえぐその姿には、たしかに病人の面影は無い。
進也もその姿に最後のたがが外れたらしく、快楽を貪るようにペニスを突きこんでいく。
「ああんっ、ああっ！　いい、いいよぅ！　あああっ！」
目を閉じて、あかねは苦しそうにも見える表情であえぐ。しかし彼女が快感に酔いしれているというのは、

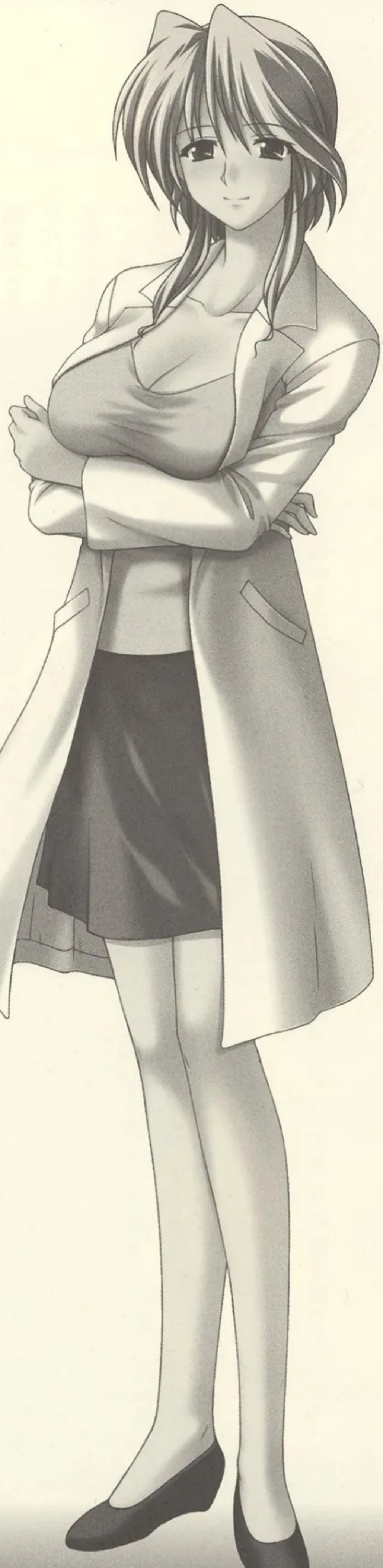
分泌されている愛液の量を見れば明らかだ。
ピストン運動をさらに激しくしながら、進也はあかねに覆い被さってくる。あかねも進也の背中と首に手をまわして、自分の身体を密着させるように抱きついた。
「あうっ、あんっ、はあっ、あああああっ、あっ！　あああっ！」
進也の腰の動きに合わせて、あかねもあえぎながら腰を動かした。
はげしく出し入れを繰り返す二人の結合部は、卑猥な水音をたてつつ、粘液を飛び散らしている。
「あ、あかね、あかね、イクよ、もうイクよっ！」
「あああっ、うん、うん、進也、一緒に……っ！」
一際強く進也の腰がつきこまれ、あかねを奥まで貫いた。
「あかね、あかね！　あかねえええええええっ！」
「し、進也ぁっ、んあああああああああああああああっ！」
手足が痙攣するほどに激しい絶頂にのけぞりながら、あかねは涙を流した。今日はじめて流す、喜びの涙。
進也の……進也の熱い精液が、私の中に……！
自分の体内に白濁液が流し込まれていく様子を想像すると、あかねは全身を襲う快楽と幸福感の渦で意識が消えそうになってしまう。
快楽の大津波が去ると、二人ともスイッチを切ったみたいにぐったりとなった。
しっかりと抱き合ったまま、自分の心音と相手の心音の協奏に聞き惚れる。
二人はそのまま、眠りに落ちていった。

※

カーテンの合わせ目から漏れる柔らかい光で、進也は目を覚ました。
あのまま朝まで寝ちゃったのか、と思いつつ、時間を見るために軽く頭をあげる。
妙に頭が重かった。
とりあえず、時刻は六時。少し早いが、起きて朝の支度をする時間だ。
上体を起こし、自分に抱きついているあかねの柔らかい身体を引き離す。

一晩中抱き合っていたせいだろうか、身体の節々に痛みが走った。熟睡していた割に疲れがとれないのも、無理な姿勢で寝ていたせいか。
と、あかねが身じろぎし、目を覚ました。
「おはよう」
進也が言うと、あかねも身体を起こし、甘えた仕草で進也に抱きついてくる。
「おはよう。ん……」
キスをねだってきたので、応える。
しばし情熱的な口づけを交わした後、あかねが不思議そうに言った。
「進也、身体熱いね。起きたばっかりなのに」
言われてみて、進也は自分が熱っぽさを感じていることに気づいた。そして、さっきから感じている身体の不調を思い起こす。
進也はベッドを抜け出すと、救急箱のところへ向かった。足取りがおぼつかない。
あかねも見守る中、体温を測る。
三十八度八分。
「う〜ん……」
数字をみた途端、停電が起こったように目の前が暗くなり、進也はその場にへたりこむ。
あかねは進也の手から体温計をとって数字を見、つぶやいた。
「そっか、進也にうつしたから、今朝はこんなに調子がいいのね……」
そして進也に、にっと笑いかける。
「今度は、あたしが看病する番ね」

了



肌とプロポーズと私

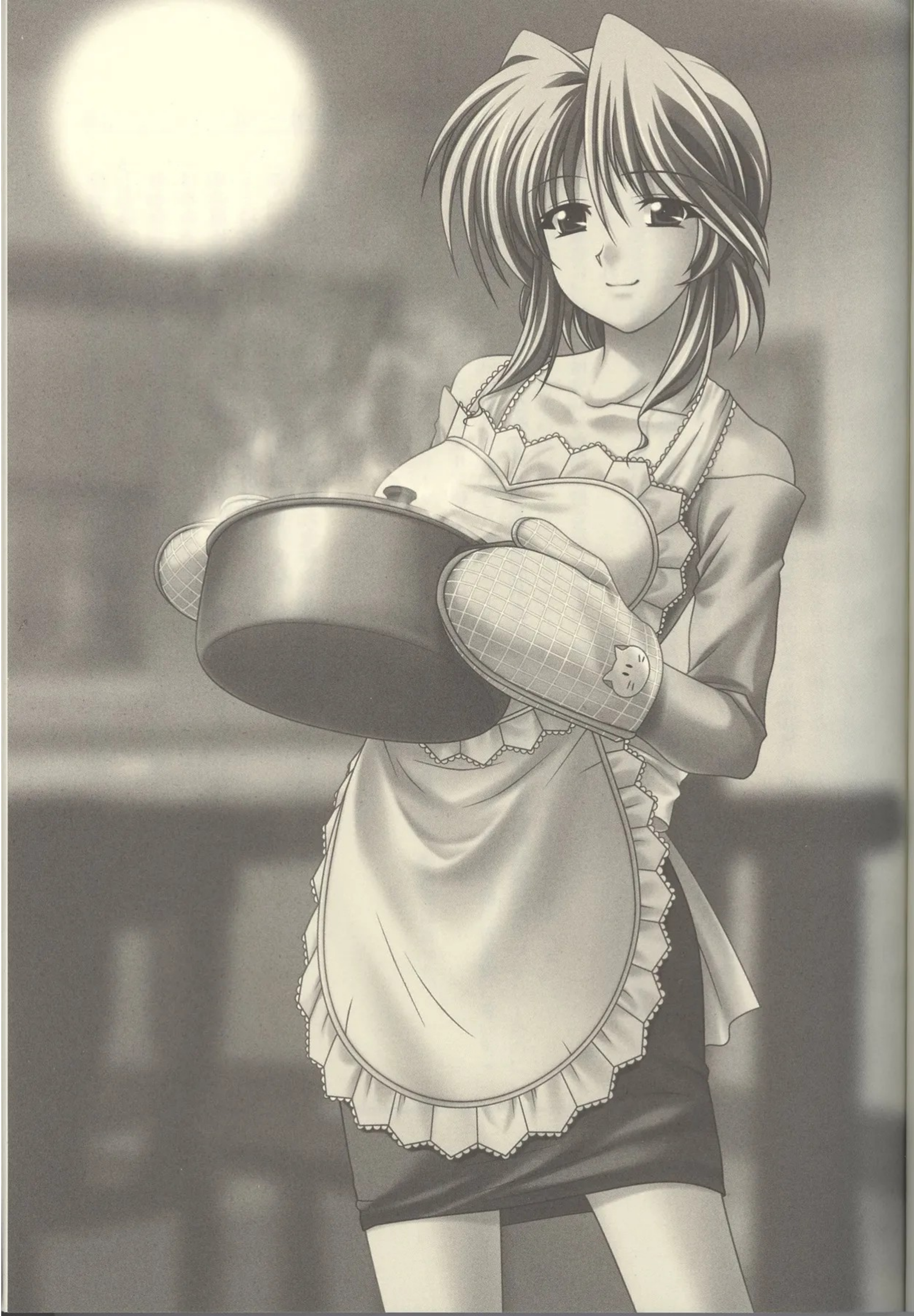
挿絵　奥間まさみ
作　緒莉

富士見 紗由美

勇二の妻で静玖の姉。豊永学園の校医でもある。勇二とは3年前に結婚した。
勇二に負けず劣らず楽観的な性格をしていて、先に身体が動くタイプ。そのせいで失敗したことも数あるが、本人は全く後悔していない。
最近の楽しみはウブな進也を軽いエッチネタでからかう事。夫婦仲はいいが、仕事で忙しい勇二との時間が持てず、欲求不満気味。

肌とプロポーズと私　紗由美

幽鬼のようにフラつく足取りで、進也はなんとか自宅に帰りついた。
「ただいまー」
玄関から声をかけたものの、誰からも返事がない。
リビングには、明かりがついている。進也の声が小さ過ぎて、廊下の向こうまで届かなかったのだろう。
連日の慣れない肉体労働で疲れ果てている進也に、もう一度ただいまを言う気力は残っていない。
魂の抜けたような顔でボーッと突っ立っていると、フワリと、食欲を刺激するいい匂いが漂ってきた。その匂いにせかされるように、進也は泥で汚れた靴を脱ぎ捨て、キッチンへ向かった。
愛しい人の後姿が視界に入ったところで、進也は立ち止まった。
システムキッチンの中で、富士見から宮本の姓に戻り義姉ではなくなった紗由美が、忙しそうに動き回っている。
二人だけで暮らすようになって、もう三年が過ぎた。
見慣れたはずの紗由美の後ろ姿が、今日は少し違って見える。
もうすぐ紗由美と、恋人同士でなくなる。
そう思うと妙な緊張感を覚えてしまい、進也は紗由美の背中に声をかけるのを躊躇してしまう。
グウウウウッ。
進也が声を出すより先に、空っぽの胃袋が激しく自己主張した。
「あら、おかえりなさい」
驚いた顔をして、紗由美がパッと振り向いた。
両手に大きな鍋を持っている。
たぶん、紗由美得意の煮込み料理だ。ボルシチか、ビーフシチューか、それとも煮込みハンバーグか。鍋の中身を想像しただけで、進也の口の中にじわっと唾が湧いてくる。
「ただいま」
「ずいぶんお腹空いてるみたいね。すぐご飯にしましょ、手を洗ってきて」



口元だけでフッと軽く微笑んで、紗由美は言った。
「……はい」
おとなしく紗由美の指示に従い、進也は洗面所に行った。
「はあぁぁぁ……」
爪の間に溜まった汚れを丁寧に洗い落としながら、進也はため息をついた。
……以前なら、もっとニコニコして出迎えてくれたのに。
ここ一ヶ月ばかり、紗由美はあまり笑顔を見せなくなっていた。
その原因は、進也が軽い気持ちで口にした余計な一言だった。

※

あの日。
進也と紗由美は並んでソファに座り、仲良くテレビを見ていた。
「はあああぁぁぁぁ……いやあねえ……」
楽しそうにドラマを見ていた紗由美が、あるCMが流れたとき、急に浮かない顔になった。
「え、何がですか？」
尋ねた進也に、紗由美はテレビを顎で指し示しながら、憎々しげに答えた。
「これよ、これ」
画面を見ると、真っ黒な背景に黄色い筆文字が仰々しく躍っている。
『警告！　あなたの肌は、もう曲がり角どころか終着駅に近づいている！』
『三十過ぎたら、死ぬ気でアンチエイジングケア！　急がないと、あっという間に取り返しのつかないことに！』
「……ずいぶんなCMだなあ」
高い化粧品を買わせるために、女性の不安を煽りたいのだろうけれど、大げさにもほどがある。
「三十になったら、もう女として終わりって言われてるみたいじゃない。失礼しちゃうわ」
口を尖らせてテレビに文句を言っている紗由美の横顔を、そっと見る。

出会った頃となんら変わらない、染み一つない肌理細かい肌。おかげで紗由美がもうすぐ三十路を迎えることなど、進也はすっかり忘れていた。
「何言ってるんですか。紗由美さん、まだまだ全然若いじゃないですか」
お世辞ではなく本音で、進也は言った。
惚れた弱みを差し引いて考えても、紗由美の容色は衰えていない。そのうえ、年齢相応の落ち着きや色気が内側から紗由美を輝かせていて、たまらなく魅力的だ。
だが紗由美はそんな自分に満足していないらしく、ぐちぐち言い続ける。
「そんなことないわよ。だんだんお肌が老化してきてるのが、自分でわかるの。頬のツヤとか、目元のハリとか……」
「え、ええ？　そう……ですか？」
ぎりぎりのところまで紗由美の顔に目を近づけてみたけれど、進也にはやっぱりよくわからない。
「あぁあ……ちょっと前までは、安い化粧水適当にピシャピシャつけとくだけで、お肌がプリプリしてたのに……こうしちゃいられないわっ。死ぬ気でアンチエイジングケアしないと、あっという間に終着駅に着いちゃう！」
いますぐ画面に表示されているフリーダイヤルに注文電話をかけそうな勢いで、紗由美は言った。
見事にCMに感化されてしまっている。
「……うーん……」
紗由美にとっては、大問題らしい。
だが男の進也には、肉眼で見てわからないような微妙な変化にこだわる感覚がピンとこない。
「別にいいじゃないですか、小じわの一本や二本増えたって」
「よくないわよっ」
紗由美はむきになって言い返す。
「その一本や二本が、すぐ十本や二十本になって、いまに顔中しわくちゃになっちゃうんだから」
年齢を重ねれば老けていくのは当たり前のことだし、たとえ小じわが増えたところで紗由美の魅力が薄れるとは思わない。
進也は、自分にとってはどうでもいいことで必死になっている紗由美が、なんだかおかしかった。

それでつい、軽い気持ちでからかってしまったのだ。
「どれどれ……」
紗由美の顔を正面からまじまじと見つめながら、進也は言った。
「うーん、確かに目尻のあたりがそろそろやばいかも。あはははは」
リビングの空気が、凍りついた。
進也が自分の発言を心の底から後悔したときには、もう遅かった。
「……私、もう二度と笑わないわ」
能面のような顔になって、紗由美は言った。
「え？　な、なんでですか？」
「笑うと、目尻のカラスの足跡がひどくなるもの。だから」
「だからって、なにもそこまでしなくても……」
「そこまでしなきゃ、取り返しのつかないことになっちゃうのよっ」
ヒステリックに言って、紗由美はソファの横にあった電話の子機を手に取ったのだった。

※

……あのときみたいな失敗は、二度とするまい。
気合を入れるため、進也は埃でざらついた顔を冷たい水でバシャバシャ洗った。
ダイニングに戻ると、すっかり食事の用意ができていた。
大ぶりの野菜がゴロゴロ入ったポトフが、テーブルの上で湯気を立てている。
「疲れてるときは、サラダより温野菜の方がいいの。いっぱい食べて、栄養つけてね」
「ありがとう。いただきます」
紗由美の気遣いが、心に沁みる。
あまり笑顔は見せてくれなくなったものの、紗由美は変わらず優しかった。
さっそく、ポトフをスプーンですくって、口に運ぶ。スープに溶け込んだ野菜のうまみが、進也の疲れた身体にじんわりと染み込んでいく。

「ねえ……最近、アルバイトし過ぎじゃない？」
紗由美が心配そうな顔で言った。
「そう？」
相槌を打ちながら、進也は柔らかく煮えた肉を口に放り込んだ。
「そんなにがんばらなくてもいいじゃない、暮らしに困ってるわけじゃないんだから」
二人はいま、紗由美の稼ぎで暮らしている。
マンションのローンは完済しているので、普通に暮らす分には特に不自由していない。
「あといくらもしないうちに就職活動始めなきゃいけないんだし……今のうちに、もっと学生生活を楽しんでおいたら？」
「……うん」
「……」
進也が必要最小限の受け答えしかしないものだから、あまり会話が弾まない。
疲れているからだろうと思ったのか、紗由美も無理に話そうとはしなくなり、なんとなく重苦しいムードが漂う。
「……ごちそうさま」
皿の中身をすべて腹の中に収め、進也はスプーンを置いた。
「おかわりは？」
「いや……もう……」
進也は首を横に振った。
ポトフは絶品だったが、これからのことで頭がいっぱいだからか、もう食べられそうになかった。
「……そう」
普段より食の進まない進也に、紗由美は少しがっかりしたようだ。
それでも文句を言うでもなく、食卓を片付けるために立ち上がりかけたところで。
「ちょっと待って。話があるんだ」
進也は紗由美の手を握って引き止めた。
「なあに？」

小首をかしげて、紗由美は再び椅子に腰を落とした。
「あの……」
左手で紗由美の手を握ったまま、進也は右手をズボンのポケットに突っ込んだ。
そして汗ばんだ手で、一ヶ月きついバイトをした成果をぎゅっと握り締める。
「その……」
全力疾走した後みたいに、心臓がバクバクいいはじめた。
何度も何度も頭の中でシミュレートしたはずなのに、うまく言葉が出てこない。
「進也くん……どうしたの？」
紗由美が心配そうに言った。
意を決して、進也は乾いた唇を開く。
「けっ」
首を絞められた鶏みたいな妙な声が出てしまい、進也は口を開けたまま凍りついた。
「……け？」
紗由美はますます心配そうな顔になり、進也の顔を覗き込む。
「ああっ……うう……落ち着け……落ち着け……」
ブツブツと声に出して言い、進也は無理矢理自分を落ち着かせる。
そしてついに、右手で握ったものを紗由美に向けて突き出した。
「僕と、けっ、結婚してくださいっ！」
言ったっ！
極度の緊張と興奮で、進也の額からどっと汗が吹き出た。
必死で貯めた金で買った、婚約指輪。
それをじっと見つめて、紗由美は微動だにせず黙り込む。
「……紗由美さん？」
「……」
どきどきしてはいたけれど、進也にはプロポーズを受けてもらえる自信があった。一緒に暮らしてきた三年の月日が、二人の絆をゆるぎないものにしてくれたと信じていた。

なのに、紗由美は頷かない。
まさか……と、急に怖くなってくる。
「……僕とは……結婚したくない？」
恐る恐る尋ねると、紗由美は首を横に振った。
「そうじゃない……そうじゃないの……でも……」
宙に浮かんだ言葉を捜すように、紗由美の視線が空をさまよう。
「……でも？」
進也に先を促され、紗由美は重い口を開く。
「進也くん……まだ学生じゃない」
「……半人前の僕とは、結婚できない？」
「違うの、そうじゃないの」
もどかしげに首を左右に振り、紗由美は先を続ける。
「卒業して、仕事について、いろんな人に出会って……進也くんにはこれから、新しい世界が待ってるじゃない」
テーブルの隅に視線をやり、紗由美はか細い声で言う。
「重荷に……なりたくないの」
進也は思わず立ち上がって紗由美の横に行き、細い肩をガッと掴んだ。
そうしなければ、紗由美がだんだん薄くなって、消えてしまいそうに見えた。
「なんでそんなこと言うんだっ！　重荷だなんてっ……紗由美さんの存在が、いまどれだけ僕の励みになってるか、わかる？」
「……でも……」
「でもじゃないっ」
まだＯＫの返事をもらっていないのに、進也は紗由美の左手をとり、薬指に指輪をはめた。
「……ほんとに……私で、いいの？」
指輪を見つめる紗由美の瞳から、ポロリと涙がこぼれ落ちる。
「紗由美さんでいいんじゃない。紗由美さんじゃなきゃ、だめなんだ」

進也は思い切り強く紗由美を抱きしめた。
汗くさい胸に顔をうずめ、紗由美も遠慮がちに両手を背中にまわしてくる。
お互いの胸の鼓動と体温を確かめ合うように、二人はそのまま抱き合い続ける。
「……この前は、ごめんなさいね。つまらないことですねたりして」
ふと思い出したように、紗由美が言った。
「僕こそ、ごめんなさい。デリカシーがなくて」
紗由美が何のことを言っているのか、進也にはすぐわかった。
「不安だったの。歳をとるのが。だから、つい……いつか進也くんが、もっと若い子のところに行ってしまうんじゃないかって、ずっとどこかで思ってた」
少しでも紗由美の不安をなくしたくて、進也は紗由美を抱く腕の力を強める。
「だって、何年経ったって、進也くんが私の歳を追い越すことはないんだもの……ね、ほんとにいいの？　私、進也くんよりずっと早くおばあちゃんになっちゃうのよ？」
親とはぐれた幼児みたいな表情をしている紗由美に、進也はありったけの気持ちを込めて笑顔をつくって見せる。
「紗由美さんなら、きっとかわいいおばあちゃんになれますよ」
「進也くん……」
ようやく、紗由美が少し笑顔になったのを見て、進也はホッとした。
「紗由美さん……」
ごく自然に、二人の唇が触れ合った。
「ん……んん……進也くん……大好き……」
聞いているだけで頭の芯が痺れてくるような甘い甘い声で、進也の名前を呼ぶ紗由美。そんな紗由美の唇を自分の唇で挟み、進也はチュウッと吸いたてる。
「……紗由美さん……僕……」
キスを交わしているうちに、疲れきっているはずの進也の身体に力がみなぎってきた。
太腿に進也の固いものがあたるのを感じて、紗由美はこくりと頷く。
紗由美の身体を抱きかかえて、進也はリビングに移動した。そしてソファの上にそっと紗由美を下ろし、も

う一度唇を重ねてから、エプロンの下に手を差し入れる。
服をはだけると、真っ白な乳房がブルンと飛び出してきた。
もう何度も見ているのに、そのあまりの艶めかしさに進也の目は釘付けになる。
「進也くん……触って……」
濡れた瞳で進也を見つめ、紗由美は軽く胸を揺すった。
こくりと頷き、進也は手の平全体で乳房を包み込む。
「んっ……ああ……進也くんっ」
ビクッと身体が震えた拍子に、紗由美の目尻からつーっと涙がこぼれ落ちた。
「私ね……ホントはずっと、進也くんと結婚したいって思ってたの」
進也の負担になるまいと、言い出せずにいたのだろう。
紗由美の切ない胸のうちを思うと、いとおしくてたまらなくなる。
「僕もずっと、紗由美さんと結婚したいと思ってた」
進也は、舌でそっと紗由美の涙をすくい取った。
「だけど、言えなかった……紗由美さんの稼ぎで暮らしてる半人前の分際でプロポーズするなんて、無責任だと思ってたから」
自分の正直な気持ちを話しながら、敏感な乳房を下から持ち上げるように揉む。
「あっ……あはあぁ……進也くんの手、気持ちいい……」
紗由美の口から、情感のこもった吐息が漏れ出た。
「先月あんなことがあって……考えが変わりました。紗由美さんが不安な気持ちでいるの知っててずるずると同棲してる方が、よっぽど無責任ですよね」
「そんな……進也くんは、無責任なんかじゃ……んっ……ああんっ」
ツンと尖ってきた乳首を指で摘まむと、紗由美の顎が跳ね上がった。
「紗由美さん、僕はまだ学生で、自分でも情けないくらい頼りなくて……絶対幸せにする、なんてこと言えない。だけど、紗由美さんと一緒に、誰より幸せになりたいと思ってる。だから」
いったん乳房から手を離し、進也は紗由美の目をまっすぐ見る。
そして心を込めて、もう一度プロポーズの言葉を言う。

「結婚してください。死ぬまで、僕と一緒にいてください」
「進也くんっ」
感極まったように言って、紗由美は進也の背中に手を回し、思い切り強く抱きついた。
「ずっと……一緒にいてね……」
「もう、離れろって言われたって絶対離れませんからね。覚悟しててください」
クスリと、紗由美は泣きながら笑った。
「進也くん……来て……」
一刻も早く進也とひとつになりたいという感じで、紗由美は言った。
服を脱がせる時間も惜しく、進也は紗由美のスカートをたくし上げ、下着だけ剥ぎ取った。
指先で割れ目に触れると、粘り気のある液体がべったりと絡み付いてくる。
「紗由美さん……すごく濡れてる……」
急いでズボンのチャックを下ろし、中から硬くなったペニスを取り出す。
先端を秘苑の入り口に擦り付けると、くちゅっと水音が弾けた。
その音に理性を破壊され、進也は勢いよく腰を突き出す。
ズブズブっと突き進んだペニスの先端が、いきなり子宮の入り口を叩いた。
「あっ、んあああああっ！」
進也を体内に迎え入れることができた喜びに全身を震わせ、紗由美は大きな声をあげた。そんな紗由美のくびれたウエストを掴み、進也は激しく腰を躍らせる。
「ああっ、気持ちいい、進也くんっ、気持ちいいっ」
「僕も……ああっ、最高です、紗由美さんっ」
とてもじっとしていられないのか、進也のピストン運動に合わせて、紗由美も腰を押し付けてくる。そのたびに、火傷しそうなほど熱くなった膣壁が波打ち、ペニスを奥へ奥へと引きずり込もうとする。
「ずっと……あああっ、ずっと、進也くんと、こうしていたい……ああっ、ああ……」
身体の中心から湧き上がってくる快楽、そして幸福感が、繋がった二人を一気に昂ぶらせる。
「うあああっ、紗由美さん、紗由美さんっ……僕、もうっ……」
収縮する粘膜に根元から先端までをきつく絞り上げられ、進也はもう我慢ならなくなる。

「あっ、ああっ、中に来て、進也くん、お願い、一緒にっ……ああっ」
進也の腰に足をからませ、紗由美は中出しをせがむ。
もちろん進也に異存はない。
巻きついてくる粘膜を抉るように掻き分け、ズンズンと下肢を弾ませていく。
「くっ、いくよ、紗由美さんっ……紗由美さんっ！」
「あっ……イクわっ、私もイクッ……んああああああっ！」
まず紗由美が、弓なりに背中をのけぞらせて絶頂を極めた。
続けて進也が限界を迎え、ペニスの先端から熱い精液をどっと迸らせる。
「あっ……あああっ！　進也くんのが、中に……うれしい……」
ドクッドクッと注ぎ込まれてくる進也の精液を身体の奥でしっかりと受けとめ、紗由美は悦びに打ち震える。
「紗由美……さん……」
このまま死んでもいいと思えるほどの充実感に包まれながら、進也は気が遠くなっていくのを感じた。
そして、まだ硬いペニスを膣内に埋め込んだまま、フッと意識を失った。

※

「フフ……ウフフフ……」
クスクス笑っているような声が、どこからか聞こえてくる。
「ん……」
「ウフフ……やぁだ……フフフフ」
ずいぶんと楽しそうなこの声は……紗由美だ。
思い切り伸びをしてから、進也はもぞもぞと上体を起こした。
パサリと、肌掛けが床に落ちた。紗由美が掛けてくれていたのだろう。
もともと疲れていたのもあって、射精直後に寝入ってしまったらしい。
「……僕……どのくらい寝てました？」
「三十分くらいかしらね。フフフ……」

微笑んでいる紗由美の口元が、ヒクッヒクッと震えている。
「……どうしたんですか?」
「あのね、私、思ったのよ」
無理矢理作ったようなすまし顔で、紗由美は言った。
「私が必死で若さを保とうとするより、進也くんに老けてもらった方が早いんじゃないかなって」
「……え?」
わけがわからないでいる進也に、紗由美は手鏡を渡した。
そこに映っている自分を見て、進也は。
「な……なんじゃこりゃあああああああああっ!」
殉職した某刑事よろしく叫ぶ進也の横で、紗由美はお腹を抱えて笑い転げる。
「あはははは、どうしたの、進也おじいちゃん? うふふふふ」
鏡に映っていたのは、五十年後の進也の顔だった。
「どう、私の化粧の腕は? うまいもんでしょ、うふふふ、あはははは」
うまいもなにも、ハリウッド映画の特殊メイク並みの出来栄えだ。
それにしても……こんなに笑っている紗由美さんを見るのは、いつ以来だろう……
すっかりうれしくなった進也は、紗由美をもっと笑わせてやりたくなった。
「紗由美さんや、笑ってないで、早く夕飯を作っとくれ。わしを飢え死にさせる気かい?」
腰をかがめ、しゃがれた声で進也は言った。
「いやだ、おじいちゃんったら、さっきご飯食べたばかりじゃない、すぐ忘れちゃうんだから……って、だめ、これ以上笑わせないで、お腹痛っ、痛たたっ、あはははは」
笑いすぎて苦しいらしく、紗由美は目に涙を浮かべてバンバン床を叩いている。
そんな紗由美の目尻に浮かんだ笑いジワが、進也には幸せの象徴のように見える。
……こうやって笑わせ続けて、いつか、僕のせいでしわくちゃになったと言わせられたら。
そんな、昔聞いた誰かの歌みたいなことを、進也は心から思った。

了

恋のオーダー・NON・ストップ

挿絵　綾風柳晶
作　Tone

宮本 静玖

豊永学園2年生で進也の幼なじみ。進也とは小学校の頃から同じクラスで今も同じクラス。

人の世話を焼くのが好きなタイプで、特に進也への世話焼きは幼なじみの範疇を超えることもある。

おかげで進也とは夫婦などと言われているが、実際は幼なじみ以上の関係にはない。ただ、進也の無意識レベルの気持ちとは違い、静玖は強く進也の事を想っている。

恋のオーダー・NON・ストップ　静玖

すでに深夜、閉店まであと三十分。
そんな時間に、進也たちがバイトするファミレスに客が来た。
進也は自分の作った料理を慣れた手つきで皿に盛りつけると、その皿をトレイに載せる。
待っていた静玖がトレイを受け取り、彼女は客の待つテーブルへと向かった。
とりあえず仕事の終わった進也は、静玖が料理を運んでいくのを目で追う。
静玖はトレイを客の前に置き、伝票を裏返してコップから離れたテーブルの端に置く。帰り道で、わずかにずれた椅子を定位置に戻した。
キッチン担当の進也は、フロア担当の静玖の仕事ぶりを目にする機会があまりない。しばらくぶりに見る静玖の手際は、なかなか手慣れたものだった。可愛いウエイトレスの制服も、さまになっている。
「こんな時間にお客さん、珍しいね」
待機場所に帰ってきた静玖に、進也は声をかけた。
「そうだね」
返事をした静玖は、残念そうに少しうつむいた。

※

紆余曲折はあったものの、晴れて恋人同士になった進也と静玖。しかし好事魔多しの言葉通り、大学は別々になってしまった。
その上、進也がいつまでも勇二の世話になってはいられないと、学費を自分で払うためにアルバイトを始めた。
バイトだけで学費を賄うのはなかなか大変だ。しかも、進学する以上、学業は決しておろそかにしてはならないと釘をさされている。そのため進也は、休日や深夜帯もバイトに当てている。
結果、進也と静玖はほとんど逢う機会が無くなってしまったのである。

この状況に、静玖は進也を追って同じファミレスのバイトに応募。採用となったものの、フロア担当にまわされてしまった。
シフトも二人の思うようにならず、同じ時間に配置されても、それが忙しい時間帯なら話すどころかお互いの姿を見ることもできない。
結局、進也と静玖が二人っきりになれる――同じ時間に配置され、しかも忙しくない――のは、一週間に一度、閉店間際の三十分だけ、というのが現状だ。

※

「こんな時間に来ることないのにね……」
「うん」
宝石のように貴重な時間が、わずかとはいえ削られて、静玖は愚痴ってしまった。進也もうなずく。
客を疎ましく思うのはお門違いだとわかっているが、二人とも不満を抑えきれない。
暗い表情のまま、静玖は進也の隣に立つ。
「はぁ……」
進也の耳に、静玖のかすかなため息が聞こえた。
どうにも雰囲気が息苦しい。
せっかくの二人の時間（客が向こうに一人いるが）がこれではしょうがないと、進也はわざとらしいほど明るい声をだした。
「静玖、最近何か面白いことあった？」
「え……うーん……」
静玖は天井に視線をさまよわせて考えたが、首を振った。
「ちょっと、思いつかないな。シンちゃんは？」
進也を見上げる静玖の表情が、わずかではあるが晴れていた。それを見て進也は、客に聞こえない程度に調子を上げて喋った。
「それがつい一昨日、ちょっとしたことがあったんだ。あのさ、子どもの頃、果物の種とか飲み込むと、その

宮本

うち頭から木が生えてくるって、脅かされたことなかった?」
「あったかも……うん、あったあった。スイカの種飲んだ時、幼稚園の保母さんにそういうこと言われたわ」
静玖はそこでくすっと笑った。
「でも私、スイカが食べられるから早く生えてこないかなって、楽しみにしちゃったけど」
「だろ? それでね、同じ学部の頭山さんて人と、学食で昼ご飯食べてた時のことなんだ」
「へ、へえ……」
「彼女、デザートにさくらんぼを食べてたんだけど、うっかり種を飲み込んじゃったんだよね。で、なんの気なしに頭山さんに『しばらくすれば胃に根を張って口からさくらんぼの木が出てくるね』って言ったんだ。そしたら頭山さん真っ青になっちゃってさ。トイレに行って吐こうとするから、今のはデタラメだって説得するのに大騒ぎ……に……」
静玖の表情に気づいて、進也は口ごもった。
最初は微笑んでいた静玖だが、だんだんとその笑みがぎこちなくなり、間もなく進也から視線を逸らしたのだ。
「あ、あれ、面白くなかった?」
静玖は無言。わずかに口を尖らせて、床を見ている。
自分の額に汗が噴き出てくるのを、進也は感じた。
「えーと、頭山さんにはまだケッサクな話があって、この前彼女と」
「……よして」
静玖の言葉に、進也の口が凍りついた。静玖は視線を床に向けたまま、続ける。
「よしてよ……面白くない。私の知らない女の人の話なんてされても、面白くないよ……」
寂しそうな声と、すねるような表情で言う静玖。
彼女が進也と一緒にいられるのは、一週間で三十分だけだ。
静玖には、進也がどんな生活をしているのかほとんどわからない。
そういうところに、進也本人が見知らぬ女性とのエピソードを楽しそうに話せば、静玖の心が穏やかでいられるわけがない。
私の知らない場所で、私の知らない女性と、私の知らないことを、シンちゃんがしている。そう考えただけ

でも、不安に襲われるのに――
そんな思いが高じての、静玖の言葉だった。
静玖の表情を見て、進也もようやく静玖の思いに気づいた。彼は自らの気遣いの足り無さに、苦い思いを噛みしめる。
一方静玖の方も、いっそう気まずくなった空気を痛感していた。
無神経なのは私の方だ。あんなこと、言うんじゃなかった。
そう後悔し、暗い表情をしている。
二人とも黙りこみ、視線も合わせないまま、時間は逃げ出したくなるほど重くゆっくりと流れた。

※

どんよりと停滞した空気に風を吹き込んだのは、客の苛立たしげな声だった。
「おーい、会計」
客の存在など九割がた忘れていた二人は、その声にはっとなる。
「レジ、やるよ」
小さく言って、進也がカウンターに向かった。
レジ打ちは、フロア担当の私の仕事なのに……？
静玖は一瞬首を傾げる。
しかしすでに進也は伝票を手にとっている。ささやかな疑問は忘れて、静玖は布巾をとってテーブルに向かった。
メニュー表をメニュー立てに戻し、テーブルを拭き、椅子を定位置に直し、食器を載せたトレイを抱えて待機場所に戻る。
静玖は眉をひそめた。進也の姿が無い。
客の姿が見えないところをみると、会計は終わっているはずなのに。
「……？」
食器を流しに運ぶ時にキッチンを見回してみたが、やはりいない。

どうしたんだろう。トイレにでも行ったのかな。
そう静玖が思っていると、ポンと後ろから肩を叩かれた。
「ひゃっ」
驚いた静玖は、しゃっくりみたいな変な声を出してしまう。
「あ、ごめん」
振り向くと、間近に進也の顔。
まださっきの空気を引きずっている静玖は、悪化させるだけだとわかっていつつ、目を進也の顔から逸らしてしまう。
「さっきは、ごめん。静玖の気持ちも考えずに、べらべら無神経なことしゃべって……」
そんな静玖を、進也はじっと見つめて、静かに言った。
「あ……」
静玖は、はっとはじかれたように進也に向き直った。
身体の奥でわだかまっていたなにかが、言葉になって口から滑り出てくる。
「ううん、私の方こそ、変なこと言ってごめんなさい。シンちゃんは全然悪くないよ」
「でも、ちゃんとお詫びさせて欲しい」
進也の言葉は妙に強い調子で、静玖は少しとまどってしまう。
「え、でも……」
静玖は途中で言葉を飲み込んだ。進也が静玖の華奢な肩を掴み、のぞき込むように顔を近づけてきたからだ。
いつにない進也の迫力に気圧されしてしまい、静玖は思わず、うんとうなずいてしまった。
次の瞬間、進也の顔が急接近し、静玖の唇にキスをした。
「ん……っ！」
静玖の目が大きく見開かれ、反射的に進也の胸を押す。
それはごく弱い力だったが、進也は自分から顔を引いた。
「こういうお詫びの仕方は、だめかな？」
「え……でも……お、お客さんが来たら……」
頭の中が急速に高まっていく自分の心音で一杯になり、静玖はそれだけ言うのがやっとだった。

進也は、落ち着いた様子で言う。
「大丈夫。今さっき、ドアプレートをＣＬＯＳＥＤにしてきた」
それでさっき姿が見えなかったのかと納得する一方で、静玖は店内の壁掛け時計に目を走らせた。まだ閉店時間まで十分もある。
「それって、マズイん」
言い終える前に、進也は再びキスをして、その言葉を断ち切る。
さっきは唇を押しつけるようなキスだったが、今度はすぐさま舌が入ってきた。
「ん……んん……！」
静玖は眉を寄せて困り顔を作った。しかし彼女の口は進也の舌を受け入れている。
進也の舌がゆっくりと静玖の口の中を動く。それにつれて、彼女の表情は次第に和らいでいった。
「んんん……ん……」
徐々に手足から力が抜けていき、静玖は目を閉じた。
そう言えば、シンちゃんとこんな風にキスするの、久しぶりだ……
間もなく、静玖も自分から舌を動かすようになる。
進也の舌使いはだんだんと情熱的になり、舌の間で唾液がはじける音が奏でられはじめる。
「ん、ちゅ……んん、んむっ、ちゅ……」
進也の鼻息が荒くなり、彼は深い口づけを続けたまま、静玖の着けているエプロンの肩紐を両肩とも落とす。
エプロンの上半分がはらりと前に垂れた。進也はブラウスの上から、静玖のふくらみにそっと手を這わせる。
と、静玖が半歩後ずさって、キスを中断した。
しかし、その顔は紅潮し、目は色っぽく潤んでいる。
彼女は、自分の胸に触れていた進也の手首にそっと手を添えると、ゆっくり後ろにさがっていく。
「もっと……こっちで……」
あの位置からではファミレスの外から見えてしまうので、奥に引っ込もうというのだ。
静玖が乗り気であることを知って、進也の中で燃え盛る情欲が、ボッと火勢を増す。
壁に背中がくっつくまで後退した静玖は、自分の身を進也に捧げるように、軽く胸を突き出した。
正面から進也の顔を見られず少し横を向いているのが、逆に流し目のようでとても色っぽい。

静玖の頬は真っ赤に染まっているが、期待と恥じらいで口元にかすかに笑みが浮かんでいる。
「静玖……」
「シンちゃん……」
甘い声で互いに名を囁きあったあと、二人はキスを再開した。
しばし舌を絡め合い、唾液を味わいあった後、進也は静玖のブラウスのボタンに指をかける。
一つ一つ、丁寧にボタンを外していく間、静玖の顔のあちこちに、ちゅっちゅっと音を立てながらキスの雨を降らせる。
「んっ、あ、あっ、あっ、んっ……」
静玖はくすぐったいような声をあげつつも、進也に身を任せている。
ボタンを全て外し終えると、進也はキスをやめ、ブラウスの前を軽く開いた。静玖のつけている白い下着が、目にまぶしい。
進也は、静玖の細い脇腹に触れる。
「あ……」
進也は静玖の腹に当てた手のひらを、ブラに包まれた胸元へと撫であげる。
シンちゃんの手が触れてる部分が、気持ちいいよ……
そう静玖は目でうったえた。
進也はブラを上にずりあげて、静玖の愛らしく整った胸をあらわにする。
「……んくっ」
進也は思わず、生唾を飲み込んだ。
しばらくぶりに見る静玖の半裸は、進也の心を猛烈に揺さぶっている。
進也は両手を伸ばし、すくいあげるようにして静玖の胸に触った。
「ああっ……」
静玖の漏らす声が熱い。
速いテンポで鼓動する静玖の心音が感じられた。自分と同じように静玖が興奮していると知り、進也は嬉しくなる。
進也はむにゅむにゅと静玖の両乳房を揉みだした。

「ん……あっ、あっ、はあっ……んん……」
潤んだ瞳で自分の胸を見下ろしながら、静玖は喘いだ。
私の胸、あんなに柔らかく形が変わって……あ……乳首が……硬くなって……
静玖は自分の身体の変化に気づいて恥ずかしく思ったが、目を離せない。同様に、進也の目も、そこに吸い寄せられている。
進也は少し前かがみになり、片方の乳房に吸い付いた。
「ふあああっ、あっ、ああっ……！」
敏感な部分に与えられた刺激に、静玖はびくっと身体を震わせる。
進也は昂ぶった性欲のままに、舌で乳頭を弄び、乳輪に唾液をすりつけ、時には前歯で甘く噛んだりもする。
さらにもう片方の乳首は指で挟んで刺激し、静玖を追いつめていった。
「ひあっ、あんっ！　んあああっ！　あ、そ、そんなに強くしちゃ……っ！」
おとがいを跳ねあげ、身体をくねらせてよがる静玖。
進也は静玖の胸を口と片方の手で攻め立てる一方、もう片方の手を下に伸ばす。
スカートをまくりあげ、静玖のパンティを触った。
「うあっ……！」
静玖の口から、またも甘い声が漏れる。
すでに、布から愛液が滴り落ちるくらい濡れていて、進也は少し驚いた。
そのまま指で押すと、じゅくっと音がしそうだ。
私、こんなに濡れてたんだ……久しぶりだからかな……それとも、職場でこんなことしてるからかな……
ぼうっとした頭で静玖が考えていると、進也はスカートをまくりあげ、それを静玖のウエストにたくしこむ。
これで、静玖のパンティが、丸見えになってしまった。
乳首から口を離した進也は、なおも片手で静玖の胸を愛撫しつつ、パンティに手をかける。
静玖は両足を『気をつけ』するみたいに揃え、脱がし易いように協力した。
ぐっとパンティを降ろす。愛液で布と股間がべっとり張り付いていて、裏返しになってしまうほどだ。
「あ……」
濡れた秘苑が外気と進也の視線にさらされて、静玖はいっそう顔を赤くしつつ声を漏らした。

進也は静玖の股間に目を釘付けしながら、パンティを焦らすようにゆっくり降ろしていく。
太ももを過ぎると、パンティは染みこんだ愛液の重みで、自然にするすると足首まで落ちた。
静玖は恥ずかしそうにしつつも、太ももをもじもじと擦りあわせて、待ちきれないといった様子だ。
進也の方もそんな静玖の仕草を見て、股間にいっそうの窮屈感を覚えてしまう。
静玖は片足の靴を脱ぐと、パンティからその足を抜く。
その間に、進也は大急ぎで自分のペニスを解放した。もちろんこちらの方も、静玖に負けず劣らず準備万端である。
「はぁ……」
静玖は堂々と屹立する進也の局部を見て、耳まで真っ赤になった。その反面、期待で呼気が熱くなっている。
進也は彼女の片足を抱えた。
潤滑液にまみれたピンク色の粘膜が、誘うような妖しい光沢を放つ。
結合の快感を予期して暴れ出しそうなペニスを必死で制御しながら、進也はペニスを入り口にあてがった。
鼻先がぶつかるほど顔と顔を近づけ、進也はせっぱ詰まった調子で言う。
「入れるよ……！」
進也の亀頭の熱さを感じ、静玖は心臓が身体から飛び出してしまいそうなほどの期待に、目を輝かせている。
シンちゃんのが、もうすぐ、もうすぐ入ってくる……！
「うん、来て……っ」
静玖の声を聞くやいなや、進也は、ぐいっと腰を突き出した。
熱い粘膜の中をそれ以上に熱いペニスが進み、一気に根本まで埋まる。
「あああああっ！」
「ああああっ！」
二人のあげる声が、きれいに揃った。
しばらくぶりに静玖に締め付けられた進也のペニスは、震えがくるほど激しい快感の信号を発している。
それは静玖の方も同じで、身体中の隅々まで喜びが染み渡っていくようだった。
こんなに……シンちゃんのが入ってきただけで、こんなに気持ちいいなんて、忘れてた……
静玖は欲情に染まった目を進也と合わせる。

「シンちゃん……っ、はやく動かして……！」
「うん、動かすよ静玖！」
言って、すぐさま腰を振り出す進也。
「あああっ、あんっ、あ、あ、ああ！」
進也の腰使いは、挿入直後にしては乱暴といえるほどに激しかったが、十分に準備が整っていた静玖の膣は、それをしっかりと受け入れる。
粘膜と粘膜が擦れあう度に、素晴らしい快感が二人の全身を駆けめぐった。
「あああっ、シ、シンちゃん、シンちゃあんっ！」
甘えた声を出して、進也の首に腕を巻き付ける静玖。
進也も静玖を壁に押しつけ、強く密着する。
シンちゃんが着てる服がなければ、このまま一つになれるのに。
そんな錯覚を抱いてしまうほど、静玖は強烈な一体感に酔いしれていた。
進也の方も、静玖に負けず劣らず、高まっている。
「ああ、静玖の中、すごく熱いよ……っ！」
まるでうわごとのような、浮ついた声。そんなことを指摘され、静玖はすでに紅潮している顔を、さらに赤くした。
しかし羞恥心を感じる以上に興奮し、静玖の愛液はさらに分泌されてしまう。
ますます深く、激しく静玖の中を突きながら、進也は言う。
「もっと強くしていいかい静玖、静玖を感じたいんだっ」
「うん、シンちゃん、もっと気持ちよくしてっ！」
返事をするのももどかしいというように、静玖は激しく頭を上下に振って言う。
途端に、静玖の身体が上下に激しく揺さぶられるほどのピストン運動がはじまった。
濡れそぼった静玖の秘苑は激しく攪拌され、白い泡が立つほどだ。
「ああっ、ああっ！　あああああああっ！」
静玖のよがり声が、深夜の店内に響き渡る。
こんなに大きな声出したら、外まで聞こえちゃう……！

静玖の頭のごく一部が、そんな冷静さはすぐさま色欲に塗り潰されてしまう。
だが、そんな冷静さはすぐさま色欲に塗り潰されてしまう。
「あああんっ！　あっ、き、気持ちいいっ！　シンちゃん、気持ちいいよぉっ！」
静玖は、進也の首にまわした両手にさらに力を込めて、叫ぶように言う。
「僕も気持ちいいよ静玖っ！」
自分の分身を強く締め付けられ、進也の方も感極まった声だ。
とめどなく溢れる快楽に翻弄され、進也は一心にペニスをうちこむ。
一方静玖の方も進也に合わせるように、普段の彼女からは想像もつかないほどなまめかしく腰を動かした。
私、こんなにいやらしい動きしてる……！　でも止められない、気持ちよすぎて止められないよぉ……
静玖は恥ずかしさにぎゅっと瞼を閉じたが、そんな羞恥心すら快感の一部だ。
二人の興奮の水位は瞬く間に上昇し、はやくも堤防を越えそうになる。
「あ、シンちゃん、私、私もうイっちゃ……イっちゃうよぉっ！」
「僕もだよ静玖っ！」
次の瞬間、静玖の身体が大きくのけぞった。
「ふあああああああああああああっ！」
静玖の一際大きな声と共に、彼女の膣が激しく進也のペニスを締め付けた。
「くううううううあああっ！」
わずかに残った進也の理性が、ギリギリのところで静玖の身体を壁に押しつけて離し、ペニスを抜かせた。
抜いた時の反動で上下に揺れながら、びゅびゅっ、びゅっ、びゅと、激しい勢いで、精液を吐き出す進也のペニス。
進也自身驚くほどの量の白濁液は、静玖の太ももから点々と着弾する。その白く不揃いな点線は、彼女の頬にまで連なった。
ああ……シンちゃんのが、私の身体に……顔に……
熱い……
うっとりとした表情で、素肌にも、ウエイトレスの制服にも、べったりと精液を貼り付かせた静玖。壁にぐったりとよりかかり、全身を駆けめぐる絶頂の余韻に震えている。

進也も壁に手をついて大きく息をつきながら、ビリビリと痺れるような快感の余波が消え去るのを待った。
やがて進也は、自分のファミレスの制服が、自ら静玖にかけた精液で汚れるのも構わずに、静玖を抱き寄せる。
あまりの快感に骨が抜けたみたいになった静玖は、進也の肩に顎をのせ、背中に手を回して、体重を預けた。
そうやってしばしの間、互いの呼吸の音を聞き、互いの体温を感じあう。
しばらくして、閉店を知らせるチャイム。
進也は静玖の耳元に口を寄せた。
「大学の試験期間が終わったら、長めの休みをとろうか」
静玖は幸せそうに目を細め、進也を抱きしめる両腕に、ぎゅっと力をこめた。

了

ふたりの兄嫁 アフターストーリーブック

2005年7月29日発行
原作　セレン
著者　Tone・緒莉
挿絵　奥間まさみ・カワギシケイタロウ・綾風柳晶
発行　セレン

禁・無断転載
COPYRIGHT(C)2005 Selen ALL RIGHTS RESERVED.

Selen